Asahi 2012/01/31

同性愛者の居場所

「マイ　ハズバンド　イズ……」

そう話す相手は、まがうことなき男性である。正直とまどった。聞き違いか、私の英語がおかしいのか。

大阪・神戸米国総領事パトリック・リネハンさんと初めて面談し、家族について話題が及んだときだ。

同性婚を公表し、ありのままに外交官活動や社会生活をおくる生き方は何とも力強く、朝刊の「ひと」欄で取り上げた。日本の役所には、なかなかいないと感じたからだ。

同時に思い浮かんだのは、かつて駐在したバンコクやマニラでの同性愛者らの存在感だ。美容院や化粧品売り場は独壇場の観があったし、大家族なら1人や2人は、「ガットーイ」や「バクラ」と呼ばれる人々が自然に暮らしていた。

民族や国によって、同性愛者の比率に大きな差があるとは思えない。すると、彼らが目につくかどうかは社会の許容度によるだろう。

欧米の同性愛者は、差別のなかで闘い、社会的、法的な地位を獲得していったようだ。一方、東南アジアの一部には、彼らの居場所がもともとある感じだ。米は二期作、川には魚影が濃い。食うに困らぬ豊かな自然のなかで、男は男らしくといった規範は必ずしも必要ないのだろう。

振り返って日本。少なくとも企業や行政組織に属していれば、相当に暮らしにくそうだ。

〈柴田直治〉